

特 集

# その症状は“かぜ”？ まちがいやすい病気イロイロ

《特集にあたって》

## “かぜ”かなと思ったら、 ちょっと考えてみましょう

「風邪は万病の元」という諺があります。「かぜ」には誰もがしばしばかかるので、軽視されることも多いが、こじれるといろんな合併症を引き起こすから侮ってはいけない、という意味です。

「かぜ」とは、一般的には咳や鼻汁などの呼吸器症状を主体とするウイルス感染症全般の総称です。「かぜ」の罹患がきっかけとなって、合併症や細菌の二次感染を起こすことがあります。上記の諺ができた頃は、現在のように経済や社会、医療資源が豊かではなく、十分な食事も摂れない人が多くいました。エアコンや羽毛布団もなかった時代で、「かぜ」にかかったら大事をとって、少しでもよい環境下で休養し、栄養を補給することを勧めた諺であったと思います。そもそも「かぜ」全般に対して病原体特異的な治療法はなく、自らの免疫力が原因病原体を打ち負かす、すなわち治癒力を高めることが最良の治療法です。昔と比べればはるかに豊かになった現代ですが、「かぜ」への対処法の原則は同じです。

また、この諺ができた当時、白血球・CRPなどの臨床検査や病原体診断検査は存在しませんでした。「かぜ」だと思われていたが、実はほかの病気で、症状が増悪し、不幸な転帰をたどった人も含まれていました。その後、時代とともに医学は格段に進歩しましたが、病気の子どもに対して迅速に正確な診断ができないことは、現代でもしばしば起こります。とくに年少児では症状の進行が早く、本人の訴えや診察所見から正確な診断が難しい場

合がしばしばあります。

本特集では、目の前の子どもが「かぜかな？」と思ったときに、注意する症状や鑑別すべき疾患について、それぞれの専門家に解説いただきました。時に、嘔吐や下痢など消化器症状をきたす「おなかのかぜ」とか、夏季に流行する発熱が「夏かぜ」と呼称されたりするので、その観点の病気も加えました。

2019年末に中国湖北省武漢市で発生した新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、2020年に世界中でパンデミックを起こし、私たちの生活を一変させました。本疾患は咳や発熱といった「かぜ」と同様の呼吸器症状を起こしますが、肺炎などの合併症や重篤化の頻度が高く、人類の脅威となりました。「かぜ」症状を起こす「かぜ」より恐ろしい病原体ウイルスが現れてしまったわけです。

COVID-19では、咳や発熱などの症状がでない感染者(無症状感染者)や軽症者からの感染伝播も一定頻度で起こることが報告され、感染症対策の難しさがクローズアップされています。しかしこのことは、COVID-19に限らず、他の病原体にも当てはまることです。また、3つの「密」(密閉空間・密集場所・密接場面)を避けること、手洗いや手指衛生の励行、咳エチケットはCOVID-19以外の疾患に対する予防策としても効果的です。日常生活のなかで「かぜ」の予防に心がけることは、多くの病気を防ぐことができると考えています。

川崎医科大学小児科学教室教授  
中野貴司 Nakano Takashi